
となりんちの陽子ちゃん

たのシイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

となりんちの陽子ちゃん

【Nコード】

N4139P

【作者名】

たのシイナ

【あらすじ】

夏休み、強い陽射し、簾、竿竹屋、少年漫画雑誌、粉末ジュース、となりんちの女の子、母ちゃん……みんな遠い日の思ひ出。

開け放たれた縁側に簾がかかり、真上に來た太陽がその割竹の隙間から容赦ない陽光をくぐらせる。それは半ズボンの先から出た少年の小さな膝小僧を照らしていた。

「おまえ、今日はどうしたの？　うちん中に居ないで外で遊んできなさい」

部屋の前をとおるとき、母親が言った。

「今、外で野球や相撲ごっこするには暑過ぎだもん……」。

漫画本を広げたまま仰向けになっていた少年は、畳の上で寝返りを打つ。茶色くなった畳の目が、拡大鏡を覗いたときのような大きさで目の前にせまった。

台所から母親がつづけた。

「陽子ちゃん、心配してたわよ。遊びに來ないって……」

県道から三〇〇メートルほど入ったこの住宅地には、車の音も届かない。夏休み前の気だるい日曜日の昼前は、ただただ退屈で遠くから竿竹屋の呼び声がかすかに聞こえて來るだけだった。

「かあちゃん、ジュース……」

食器棚からガラスのコップを取り出すときの、カチャツという音がした。粉末のオレンジジュースを入れて、水道の蛇口をひねる。カチャカチャと、かき混ぜる音。

あ、今日はスプーンを使ってる。たまに箸でかき混ぜてるときは、こんな音じゃないもんな。

母親がコップの汗を拭いながら、目の前のちゃぶ台に置いた。

「なんで、陽子ちゃんと遊ばないの。この前まで仲良かったのに」

少年は上体を起こしてジュースを手にとると、ひと口飲んだ。

「別に」

舌を突き出し、人差し指でなでた。指の先つぽがわずかに赤い。口の中はもっと橙色に染まっているだろう。

やーい、やーい。

昨日まで仲間だと思っていたあいづらが、五〇メートルも向こうではやし立てる。

おんな、おんな、おんな、おんな……。

裏手の家の同年の陽子は、その頃小学校から帰るといつもひとりだった。

「陽子ちゃん、遊ぶ？」

だが、玄関先で女の子の遊びにつきあっていた少年は、直ぐに飽きてしまった。

それを敏感に察したのだろう、陽子は言った。お相撲する？
彼女はすぐに立ち上がって、棒切れを拾い小さな円を描いた。

いつも男の子同士でするような乱暴なブチかましは出来ないの、少年は静かに四つに組んだ。陽子は少年の半ズボンのゴムの部分を握っていたが、少年は彼女の腰の後ろに両手を置くだけだった。だって、スカートを掴んだらまずいと思ったから。

この年頃の女の子の体は少年より大きめで、いつもと違う柔らかな感触が両手と胸から伝わってきた。

やーい、やーい……。

あれは一時期の気まぐれだったのだろうか。

次の日から、買って貰ったばかりの自転車にまたがると、少年はまた仲間たちと近所へ冒険に出かけた。

、了、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4139p/>

となりんちの陽子ちゃん

2010年12月18日22時42分発行